

## 『アジサイの香り』

果伊江

軽トラを停めると、庸介は傘も差さずに外へ出た。荷台に積んだ水滴の付いたアジサイを抱きかかえる。両手一杯のアジサイは、庸介の作業服を濡らした。

このまま中へ入って嫌がられないだろうか。庸介は特別擁護老人ホームの前で悩んだが、結局は花を見せたい気持ちが勝った。

廊下を曲がったとき、看護師に手を引かれた老女とぶつかりそうになり、はっとした。

「すみません」

庸介は二人が進めるように花をよけた。開け放たれた窓から、熱と湿気を含んだ風が舞い込み、ふわりとアジサイが香った。それは花というより葉に近い香りだった。

「まあ、きれい」

老女はアジサイに見とれると足を止め、少女のように胸の前で両手を合わせた。細身の黒いパンツに黄色いストライプのシャツ。小柄だけど背筋を伸ばして歩く姿は、この施設にはふさわしくない若々しさがある。

庸介は見つめすぎないように気をつけて、老女の次の言葉を待った。ここの患者は、知らない人に話しかけられるとパニックに陥る場合があると、以前職員に注意を受け、自分からは話しかけないようにしていた。

「あとう、そのアジサイ、一本いただけないかしら？」

老女が庸介に言った。祭りのぼんぼりのようなピンク色のアジサイは、仄かに周りを明るくしている。

「アジサイって、思い出があるの。息子が初めてくれたお花だから」

庸介は子供の頃、いつも遅くまで外で遊んでいたのを思い出した。

「親孝行な息子なの。夫を亡くして辛かったとき、公園のアジサイをプレゼントしてくれたの。本当はいけないことなんだけど、幼い子供だったから……。すごく嬉しかったわ」

「息子さんですか？」

看護師の問いに、老女は嬉しそうに頷いた。

「ええ、とても優しいの。それに賢いのよ。東京の大学を出て商社に勤めているの。今はニューヨークで、家族と住んでいるのよ」

庸介は、アジサイを一本差し出した。そのとき老女は、庸介の濡れて汚れた作業服をちらりと見て、眉をひそめたように見えた。

「あとう、波恵さん。お子さんはお一人？」

看護師が、躊躇いがちに老女の名を呼んだ。

「そうよ。以前にも、そう言ったでしょう」

波恵の表情に迷いが無い。看護師が気の毒そうにこちらを見た。

「そうだったかしら？ 確か息子さんがお二人いるって……」

看護師に言われて、波恵は不安そうに両手で頭を抱え込んだ。

「どうしよう。私また、色んなことを忘れちゃったのかしら……」

人は記憶を無くすとき、どうでもいいことから忘れていくのだろうか。

庸介も覚えている。幼稚園の頃、庸介は公園でアジサイを摘んだ。そして、渡したのは兄さんだった。母さんは喜んで、花の香りを胸に一杯吸い込み、兄さんに頬ずりをした。庸介は雨の中、植え込みにしゃがんで服を汚したものだから、叱られた。でもそのときの母さんはとてもきれいだった。それからアジサイは母さんの大好きな花になった。

僕は母さんが自慢する兄さんみたいになれない。三十過ぎて定職がない上に、いまだに独身。でも母さんを大切に思っている。

「よかったら、これ全部差し上げます」

庸介が看護師に花束を渡すと、波恵は花に顔をつけて、大きく息を吸い込んだ。波恵の白い頬がピンク色に染まる。

昨日ニューヨークの兄さんに電話したけど、忙しくて帰国できないらしかった。

礼を言っ、花の香りをまといながら手を引かれて行ってしまおう波恵の背中に、庸介は呟いた。

「母さん、僕を思い出して」